

誰もが知りたい
ローザンヌ宣教シリーズ

No. 23

名目上のクリスチャン

附録 入船尊「脱落者を防ぐために」
根田洋一「意識調査報告」



*Let
the Earth hear
His Voice*

**Lausanne
Occasional
Papers**

No. 23
Thailand Report-

**Christian Witness
to Nominal Christians
Among Protestants**

Lausanne Committee for World Evangelization

関西ミッション・リサーチ・センター/日本福音同盟

誰もが知りたい

ローザンヌ宣教シリーズ

№. 23

名目上のクリスチャン

ローザンヌ宣教シリーズ

邦訳出版の経過

1974年7月、景勝の地、スイスのレマン湖畔ローザンヌで開かれた世界宣教国際会議（ICOWE）は、まさに、近代における宣教の歴史にとって、画期的な意義深い会議となりました。

勿論、世界150カ国から、約4,000人近いキリスト教指導者達が集まって、10日間にわたり、祈りのうちに、宣教大命令について、共に考え、学び、論じ合ったということだけでも、実に特筆すべき事柄であったと思います。

しかし、そこにとどまらず、この会議の後、継続委員会——現在では、それが発展して、70名に及ぶ委員によって構成されるローザンヌ世界宣教委員会（LCWE）となっている——が設置され、今日まで、10年間にわたって、世界宣教や伝道の諸問題を、あらゆる角度から、深く掘り下げ、それぞれ、神学、戦略、コミュニケーション、禱告という分野において、その活動を継続的に推進してきているということは、大いに評価されなければならないことであります。

かく云う筆者も、過去6年間、この委員会の末席を汚させていただき、実行委員の1人としてご奉仕させていただいたのでありますが、LCWEは、特定の団体や組織や教派にかたよらず、あらゆる福音主義者を結集して、世界大の宣教のわざにあずからせることを目的に、今日までその運動を展開してきました。そのよって立つところの信仰的基準は「ローザンヌ誓約」です。これは、世界における福音宣教ということ、単に垂直的にとらえるだけでなく、文化及び社会を、巾広く、グローバルにとらえながら、全人的な救いということ、宣教論的に志向している、現代の福音主義の立場を代表しているものです。

具体的にどのような活動が展開されてきたのかと云いますと、国や地域毎に開かれた伝道会議、特定のテーマをかかげて開かれた研究協議会（コンサルテ

ーション)、さらには、種々の大会などをあげることが出来ます。LCWEでは、こうした会議や会合の成果を、出来るだけ広く、そして草の根レベルの教会や信徒にまで及ぶようにと、ローザンヌ宣教シリーズ(LOP)と銘打って、現在まで24冊に及ぶ報告書を出版してきました。

早くから、英文で出されたこのシリーズの邦訳をと願いつつも、仲々その機会を見出せずにいたところ、関西ミッション・リサーチ・センターの前理事長服部嘉明先生と理事の先生方のご理解とご支援をいただき、また日本福音同盟の全面的なご協力を得て日本語で紹介することが出来るようになり、既にそのうち何冊かが出版されております。私達は、このような有意義な企画が、愛する祖国、日本の諸教会に連なる多くの教職・信徒の方々にとって、時宜を得た、しかも大いに有益なものであることを確信いたしまして、今後も、残りのシリーズの出版に鋭意努力していく所存であります。

もとより、関西ミッション・リサーチ・センター(KMRC)は、その創設当初より、日本という文化と社会の中にありながら、世界的な視野を持った福音主義の宣教研究所として存続してきており、このシリーズの出版だけをもって事足れりとしているわけではありません。しかし、その活動の一環として、この事業を手がけることが出来たことを、主に心から感謝するものです。

どうか「誰もが知りたい」この宣教シリーズを、よくお読み下さり、また宣教に重荷と関心を持つ教友に是非お勧め下さい。

終わりに、このシリーズの邦訳及び出版権を許可して下さったローザンヌ世界宣教委員会と、このシリーズの出版に全面的に協力して下さった日本福音同盟、また側面から支援して下さったノールウェー・ルーテル伝道会に心から感謝の意を表わします。

1984年7月6日

関西ミッション・リサーチ・センター(KMRC)

理事長 古 山 洋 右

はじめに

「プロテスタントの名目上のクリスチャンへの対応策」というリポートは、1980年6月にタイのバッタヤで開かれた世界宣教協議会の分科会の報告資料であるローザンヌ宣教シリーズのひとつである。このリポートは、「プロテスタントの名目上のクリスチャンへの対応策を協議するための小分科会」の出席者たちにより審議せられたもので、チェアマンはベッツ博士であった。同博士は、同主題の準備委員の国際委員としても働いてこられた。

このリポートの大部分は、草案も改訂草案も小分科会の全出席者が目をとおした。又、より広い拡大検討委員会にも提出せられた。しかしこのリポートの最終責任は、小分科会とチェアマンにある。

このリポートが、教会と、会員を励まし、多くの兄弟姉妹たちに働きかける勇気とちえを与えるために少しでも役立つようにと願っている。

(International Co-ordinator : Dr. Ulrich Betz, 39 Kleekoppel, Norderstedt, Schleswig-Holstein, West Germany)

訳者註

ローザンヌ・シリーズの日本語訳が、関西ミッション・リサーチ・センターと日本福音同盟の協力によってすすめられ、すでに七冊が出版され、いずれも好評をいただいていることを感謝している。「プロテスタントの名目上のクリスチャンへの対応策」は、ローザンヌ・シリーズの最後の23番目のリポートであるが、第10番のカトリック、第19番のギリシャ正教の、それぞれ名目上のクリスチャンへの対応策のリポートと並行している。しかし、日本において前二者を翻訳出版することはあまり意味がないと考えられ、最後の23号を八冊目

に出版することにした。

ここ十年ほど日本において教会成長論に関する本はかなり出版せられたが、「教会成長論の蔭」の部分について論じられることは少く、ましてやそれに光をあてて対応策について検討する作業はほとんどなされていない。それゆえ小冊子であっても本書の出版の意義は大きいと考え、とくにクリスチャン新聞（根田祥一記者担当）と、入船尊先生、又、関西ミッション・リサーチ・センターのスタッフ（総主事ソルハイム博士、田中智恵氏）の協力を得て、まず日本の実状を調査し、又、いくつかの教会の動態調査を行い、「日本における対応策」を附録としてつけ加えることにした。

しかし、附録をつける作業は思わぬ困難に直面することになった。クリスチャン新聞、百万人の福音の協力によって、3500のアンケートを配布、普通の回答率5パーセント、すなわち、約200の回答数を予想していたところ、なんと500、すなわち、14パーセントの回収となり、しかも牧師だけで90近い回答をいただいたことである。しかも多くの貴重な意見が寄せられており、これを2月4日に予定していた出版期日に間に合わせるために完全な統計表を出すことは不可能であることが判った。第二は、アンケート調査を補うため阪神間のいくつかの動態調査を行いはじめたところ、これも意外に作業量が多いことが判り、又、なぜ阪神間にとどめるのかとか、農村地区の教会の動態調査も行うべきであるとかの要望をいただき、それも、出版期日にまとめあげることが不可能であることが判ってきた。それで、スタッフ・ミーティングにおいて、中間調査報告と、入船師による問題提起のための小論文をつけ加えることにより、とりあえず回答をお寄せ下さった方々の御好意にこたえることとし、あらためて、「名目上のクリスチャンへの対応策」の継続作業のレポートを各関係諸団体や、諸先生方の協力をいただいて、今年一杯をめざして、次の出版をめざしている。中間報告においても、すでに、日本における教会脱落の原因

は本人自身の信仰の弱さ、すなわち、信仰者個人の内的意識に第一の原因があることが示され、我々が最初第一の原因と予想していた人間関係のつまづきとか、牧師へのつまづきは、第二、第三位ということが判った。しかし、信仰者が感じる「信仰の弱さ」とは何を物語っているのであろうか。その意味が明確化されなければ対応策もたてられないわけである。パタヤ・リポートの翻訳、根田氏による中間調査報告、入船師の問題提起文をお読みになり、是非今後の継続作業に御協力下さるようお願いしたい。

鍋 谷 堯 爾 神戸ルーテル神学校教授
関西ミッション・リサー
チ・センター理事

1985年1月15日

目 次

プロテスタントの名目上のクリスチャンへの対応策

1. 名目上のクリスチャンの定義	1
2. その原因	2
a. 思想的要因	
b. 社会的要因	
c. 教会的原因	
3. 新生した教会の必要性.....	5
4. 日常生活に密着した伝道と地方教会	7
a. 個人的クリスチャンのあかし	
b. クリスチャンの家庭生活のあかし	
c. 会衆のあかし	
5. 計画的な伝道	10
6. 回心者の成長をめざして	14
7. 結 論	15
あ と が き	16
脱落者を防ぐために	18
“脱教会、体験5割超す”	33